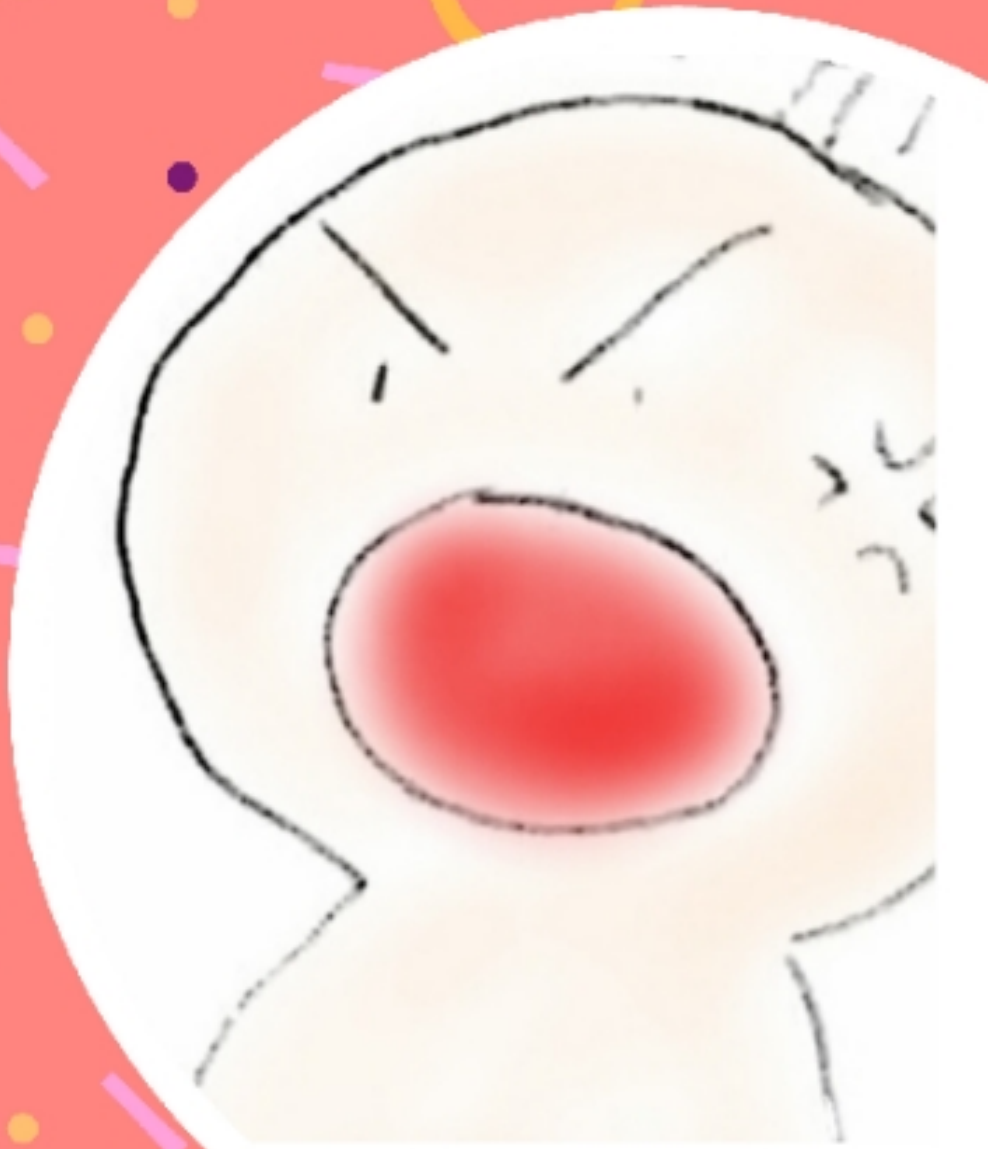
パワハラを受けていた僕の秘密



目次

パワハラを受けていた僕の秘密 1

パワハラを受けていた僕の秘密

「谷山くん、最近の売上の落ち込みは酷いな」

江田が資料を左手に持ち椅子に半身になって視線をぶつけてきた。眼鏡の奥で小さな黒目が光る。細い眉と眉の間には深い皺が入っている。

「申し訳ありません。頑張っているのですが.....」谷山は唇を噛んだ。

「頑張ってるの？ ほんと？」江田は座りなおし両肘をついて谷山の顔を覗きこんだ。

「はい、頑張ってるつもりです」谷山は背筋を伸ばした。

「つもりね？ つもりなだけでしょ」

江田が眼鏡の縁に指をかけ目を大きく見開いた。爬虫類を思わせる目で睨まれ谷山は肩をすぼめた。

「申し訳ありません。結果を出せるように頑張ります」

「低迷の原因は把握してるの」

「いや、これから原因を調べようと思っていまして.....」谷山は声がだんだん小さくなってしまった。

「聞こえない。これからって言ったのかな」

「あ、はい」

「そう、これから？ のんびりでいいね。だからそんなに太れるんだ。今何キロ？」

「えっ？ 何キロ？ 体重でしょうか」

「もう、いいよ。話が通じないね。おもしろくもないな」

「申し訳ありません」

「他の従業員は売上落ちてることに危機感持ってるの」

「いえ、まだまだです」

「仕方ないね。店長がこれだもん。部下の意識も低くなるよ」

「申し訳ありません」

「今も荷受場のところで山本とかいう社員がニコニコ笑ってたよ。売上悪いのに気楽なもんだ」

「私の教育不足です」

「山本って大丈夫？ ちゃんと仕事やってるの」

「あいつは出来が悪くて困ってます。売上が落ちているのもあいつのせいです」

「あっ、そう。なのに、山本の教育もしてないんだ。若い子はビシビシいかないとダメになるよ。甘やかしてんじゃないの」

「はい、もう少し厳しく教育してまいります」

「売上アップと部下の教育、しっかりたのむよ」

「はい」

「じゃあ、期待してる」江田がそう言って壁の時計を見た。「帰るね」立ち上がり隣の椅子においてあるコートを手にとった。

谷山も立ち上がり深々と頭を下げた。

「部長、ありがとうございました」

「ここでいいよ」

見送りしようとする谷山を右手で制して右の口角だけを上げた。「つもりじゃなくて本気

で頑張って」

「はい、本気で頑張ります」

谷山は店長室から出ていく江田の背中に向かって、もう一度頭を下げた。「ありがとうございました」

「それから」江田がドアの前で立ち止まり振り返った。

「はい」谷山は下げていた頭を持ち上げた。

「荷受場はきれいにしておいた方がいいね。乱雑で床もドロドロだった。お客様から見えるよ」

「申し訳ありません」

「汚いものは排除する。出来ないものも排除する、だよ。君も排除されないように頑張って」

江田が出ていったあと、谷山はゆっくりと頭を持ち上げた。拳を強く握りしめ歯軋りした。

「クソー、山本のせいだ」

「優人くん、この間の販促企画はどうだったの」休憩中に先輩の木原翔子が山本優人に声をかけてきた。

「全然ダメでした。まったく売れなくて在庫があふれちゃいました」

優人は頭を掻いた。

「そっかー。面白い企画だと思ったんだけどね。全国各地のお味噌を集めるなんてわたしには思いつかないわ」

「地方によって味噌の色や味、原材料が違うのがおもしろいなって思ったんです。北海道は中辛口で赤い味噌ですし、仙台味噌は辛口で赤です。江戸の甘味噌や東海の豆味噌、関西の白味噌、九州の麦味噌とか調べてるうちに集めてみたくなったんですよ」

「いっしょに陳列してた『手作り味噌セット』もおもしろそうだった」

「あれは後から思いついて追加したんです。家庭でお味噌を作ると、その家庭オリジナルの味噌が作れますからね」

「あれ見て、わたしも作ってみたくなったもん」

「そうですか、ぜひ作ってみてください」

「うん」

「木原さん、お味噌を作る時のポイント知ってます？」

「やっぱり難しいの？」

「そんなことないです。けど、最初に大豆にしっかりと水を吸収させておかないといけないんです。大豆が水を吸収するのを根気強く待つのが大事です。あとはカビには注意ですね」

「やっぱり難しそう」

「説明書がありますので、その通りやれば簡単です」

「そっかー、じゃあ、『手作り味噌セット』買って挑戦するわ」

「嬉しいです。ありがとうございます」

「優人くんは、いろいろ考えて勉強してるからすごいよね」

「そう言ってくれるのは木原さんだけです。店長からはお前の趣味で仕事するなって滅茶苦茶に怒られました」

「店長も最初はあの企画に乗り気だったくせに結果が悪かったら手のひら返してさ。ほんと卑怯」

木原が口を尖らせていた。

「まぁ、そうですけど」

「ダメだと思ったなら、やる前に言えばいいじゃない。この企画はダメだ。練り直せって」

「けど、僕の企画をやらせてくれたから感謝してるんです。やる前から否定されるのも嫌ですし」

「ハァー、お人好し」木原が両手を軽く上げ首を傾げた。

優人は木原の顔を見て自然と口角が上がった。

「やまもとー」休憩室のドアが開くと同時に怒鳴り声が飛んできた。

優人が声の方に視線をやると谷山がドアの前で息を切らしていた。

「あっ、はい」優人は立ち上がった。

テーブルを挟んで前に座っていた木原は座ったままドアの方へ振り返った。

谷山のぎょろっとした目が一段と大きくなり残り少なくなった髪の毛が逆立っていた。額に浮かぶ汗が玉になって流れている。

「お前、なに、さぼってんだよ」休憩室のドアから拳を強く握りしめ一歩二歩と優人の方へ向かってきた。

「さぼってません。今、昼休憩の時間なんです」

「お前に休憩なんかあるわけないだろ。売上落としてるくせしやがって」

「すいません」

「すいませんじゃねぇ。女としゃべってる暇あったら、さっさと仕事しろ」

木原が谷山に厳しい視線で見上げた。谷山は木原に一度視線を落としたが、すぐに優人にもどした。「わかったか」

「あっ、はい」

「罰として今日から毎日帰る前に荷受場の掃除しろ」

「えっ、毎日ですか」

「当たり前だ」谷山はそのまま踵を返しドアを思いきり閉め休憩室から出ていった。

「なに、あれ」木原が言った。

木原が閉まったドアに視線を残し頬を膨らませていた。

「さっき、部長が来てましたから、部長に怒られたんですかね」

「多分ね」木原は椅子の背もたれに体を預けた。「ちっちゃい奴ね」

「ええ」優人は軽く頷くだけにした。

木原が搬入口に放置されていた空き缶や空き瓶、段ボールを片付け分別してくれていた。優人は床に洗剤を撒きデッキブラシで磨いた。最初白かった泡が灰色に変わり最後は墨のように黒くなった。店長の言う通り確かに床は汚れていた。ホースで黒くなった泡を流すとツヤツヤしたモスグリーンの床が顔を出した。

「よし、きれいになった」

「ほんと、きれいになると気持ちいいわね」木原が白い歯を見せた。

「なんか達成感がありますね」優人が木原に向かって笑顔を返したが、木原の視線は優人を飛び越していた。白い歯が消え口元は歪んでいる。

優人が木原の視線の先へ振り返ると、短い腕を組み眉間に皺を寄せた谷山が立っていた。

「店長、掃除終わりました。きれいになりましたよ」きれいになった達成感で清々しい気分のまま言った。

「なんで木原に手伝わせてるんだ」

「えっ」

「お前一人でやれよ。木原だって、他にやる事があるんだ。それが出来なくなるだろ。他の者に迷惑かけるな」

「すいません」

「店長、わたしが勝手に手伝ってるんです。山本くんに頼まれたわけじゃありません。それにここは共有の場所ですし、全員で当番制にするべきじゃないで.....」

「うるさい」谷山が木原の言葉を遮るように大声を出した。谷山が木原を睨んで続けた。「最近異動してきたばかりで何もわからないくせに、女のくせにつべこべ言うな。こいつは、これまでみんなに迷惑かけてるんだ」谷山が優人を指差しながら声を荒げた。

「山本くんはみんなにどんな迷惑をかけてたんでしょうか」木原も負けていない。

「うるさいんだよ。城山店に配属になったんだから城山店のルールに従え」

木原が口を尖らせて谷山を睨み付けた。谷山は木原の視線をかわし優人に視線を移した。

「山本、すべてお前のせいなんだよ」谷山が優人に向けて顎を突き出しながら吐き捨てた。

「わかりました。明日からは一人でここの掃除をします」

「お前のせいで城山店の売上が落ちてんだよ。お前は疫病神なんだからな。それを自覚しておけ」

優人は唇を噛みしめ言葉を呑み込んだ。

立ち去る谷山の背中を木原はまだ睨んでいた。

「これ、パワハラよ」木原が谷山が出ていったドアに視線を残したまま言った。

「パワハラなんて大げさですよ」

「大げさなことないわよ。店長はこれまでずっと優人くんにあんな態度だったの」

「そうですかね」

「そうですかねって、呑気なこと言ってちゃダメ。こんなこと許してたら、そのうち優人くんが精神的にまいっちゃうよ。これは訴えるべきよ」

「僕は大丈夫です。訴えたりしたら、もっと酷くなるかもしれないし谷山店長も傷付くし」

「本当、お人好しね。優人くんがやらないなら、わたしがやる。でないと城山店の売上は落ち続ける気がする」

谷山は城山店の最寄りの駅前にある喫茶店に向かっていた。開店準備で慌ただしい時に、ミーティングするから開店準備が終わったら喫茶店に来るように江田から電話があった。これまで江田が喫茶店でミーティングをするという時は、江田がご機嫌でランチをごちそうしてくれる時か、谷山にとって悪い話を聞かされる時かのどちらかだ。ランチの時間にはまだ早いし江田の電話での口調から悪い話を聞かされるのだと見当がついた。喫茶店へ向かう谷山の胸はキリキリと痛んだ。

喫茶店に入って店内を見渡すと、江田はすでに到着し席に座りタバコを咥えていた。江田の顔が歪んでいた。谷山は慌てて江田の座る席へと向かった。

「部長、お疲れさまです」

「コーヒー頼んでおいたけど、よかった？」タバコを灰皿に押しつけ煙を吐きながら言った。

「あっ、はい。ありがとうございます」

谷山は江田の前に腰をおろすと江田が厳しい視線を向けてきた。その後、何も言わず宙に視線を移した。

谷山は江田の顔色を窺いながら、黙って額から吹き出る汗をおしぼりで拭いた。まちがいなく江田の機嫌が悪い。何故だろうか。売上が上がっていないからだろうか、それ以外に自分は何かしでかしただろうか、ぐるぐると思考を回した。

コーヒーが運ばれてきてウエイトレスが立ち去ってから江田が口を開いた。

「お店の方は順調ですか」コーヒーを口にしながら言ってきた。

「いや、まだまだです」

それをきいて江田の口が尖った。谷山を一瞥してタバコを取り出し火をつけた。煙を吐き出しながら「はぁ」とため息をついた。「まだまだね」そう呟いた。

「申し訳ありません」

「それも早く何とかしてほしいんだけど、新たに問題が出てきたよ」

「えっ、新たに問題ですか」

爬虫類のような目が谷山に向けられた。

「私のところに変なメールが届いたんだよ」

「メール？ 誰からですか」

「城山店の従業員から匿名で届いた」

「どういうことでしょうか」

谷山がそう言うと江田は口元を歪めタバコの煙を吐き出した。

「城山店でパワハラが横行しているのでなんとかしてほしいといった内容でね」そう言うとタバコを灰皿に荒っぽく押し付けた。

「うちの店でパワハラですか」

「そう、思い当たることは？」そう言って江田は二本目のタバコに火をつけた。

「いやー、わからないですね」谷山は首を傾げた。

「わからないですねって無責任だね。あんた店長でしょ。自分の店でパワハラがあるかもしれないのに、わからないと言ってるわけ？」

「申し訳ありません。な、ないと思います」

「えっ、思います？」

「いえ、ないです」

「そう、ないね。よしわかった」江田がタバコを灰皿に押しつけた。

「もし、この件が人事部の耳に入ってもやっかいなことにはならないよね」

「は、はい」

「それから、私は今城山店ではパワハラはないと君から確認をとったからね。もしパワハラが発覚しても君の方で何とかしてくれるよね」

「いや、ちょっと待ってください」谷山が右手の平を江田に向けた。

「なに？」

「もしかして、山本？ ですかね」

「そんなこと知らないよ」

「先日部長が訪問された時に、私が足を引っ張られていると話した社員です。部長からビシビシと教育しろと言われたので、厳しく教育はしましたけど」

「ビシビシと教育しろと言ったかもしれないけど、パワハラしてもいいとは言ってないだろ。谷山くん、パワハラを私の責任にするわけ」

「いえ、そんなつもりはございません」

「私を巻き込まないでよ。君に指導能力がないだけでしょ」

「あっ、はい、申し訳ありません」

「私には責任ないよね」

「はい、部長に責任はございません。すべて私の責任です」

「そう、それならいい。けど、これ以上大きくならないように頼むよ」

「はい」谷山は背筋を伸ばしてから頭を下げた。

「じゃあ、これで帰るわ。無能な店長で頭痛いわ」江田は千円札をテーブルに叩きつけ、残っていたコーヒーを飲み干し席を立った。

喫茶店を出ていく江田の背中を見て谷山はため息がでた。

「ハァー。そっちこそパワハラだろ」

優人が昼休憩に入ろうとした時に谷山から内線が鳴った。すぐに店長室に来るようにと呼ばれた。開店してからしばらく出かけていたようだが、さっき背中を丸くしてトボトボと歩く後ろ姿を見かけたので、今帰ってきたところだろう。

「優人くん、どこ行くの」木原が尋ねてきた。

「店長に呼ばれたんで店長室に行ってきます」

「イヤな予感」木原が眉をひそめた。

「ですかね」優人は首を傾げて笑った。

店長室のドアをノックすると「おう、入れ」と中からドスをきかせた声がした。

「失礼します」ゆっくりとドアをあけると谷山の歪んだ顔が見えた。

「おう、そこ座れ」谷山が前にあるパイプ椅子に向けて顎を突き出した。

「はい」優人が座るとすぐに谷山が口を開いた。

「お前、部長にチクっただろ」机をドンと叩いた。

「えっ、何をですか」

「俺がお前にパワハラしてるってだ」

「いえ、そんなこと言ってません」

「嘘つけ。俺はそれで部長に呼び出されたんだよ」

「そうなんですか」

「何がそうなんですか、だ。いいかげんにしろよ。俺はお前にパワハラなんかしてないからな。お前の出来が悪いから教育しているだけだ。自分が出来ないことを棚にあげて、勝手なこと言うな」

「わかりました」多分木原さんだろう。それを言うと木原さんまで巻き込まれるかもしれないので口を閉ざすことにした。

「江田部長には俺から説明しておいたから、これ以上部長に心配かけるな。二度と部長に連絡するなよ」

優人は俯いてため息をついた。

「わかったか」店長室のドアのガラスが響いた。

「わかりました」優人は笑って店長室から出ていった。

店長室を出ると木原が立っていた。

「何だったの」

「江田部長にパワハラしてるとチクっただろうって怒られた」

「やっぱり」木原の眉がハの字になった。

「木原さんですか」

「ごめんね」木原が優人に両手を合わせた。

「やっぱり。多分そうかなと思いましたけど」優人は口角を上げた。

「わたしのせいで、また店長に怒られちゃったね。ほんとごめん」木原はまた両手を合わせ頭を下げた。

「いえ、僕の方こそ木原さんに心配かけてすいません」

「これじゃ、店長のパワハラはおさまりそうもないわね。江田部長は店長と仲良しだからダメみたいね」

「なかなか難しそうですね」

「人事部に報告したら変わるかな。優人くん、人事部に報告してもいいかな？」

「あきらめないんですか」

「当たり前よ。こういうことは許しちゃダメだから。今度は優人くんに迷惑かけないように、匿名じゃなくわたしの名前出すから」

「いいです。匿名で送って下さい」

社長の山本信一郎は江田の前で眉間に皺を寄せていた。

「城山店の売上が厳しいようだね」

「はい、申し訳ありません」江田は深々と頭を下げた。

「なにか、原因はあるのかな」

「谷山は、ある社員が足を引っ張っていると悩んでおりました」

「社員一人で、そんな影響するもんかね。他にも原因があるんじゃないか」

「はぁ、ごもっともです。もう少し谷山に確認しておきます」

「社員が足を引っ張ってるというけど、社員の教育はしっかり出来てるのかな」テーブルに両肘をついて両手を合わせた。

「谷山が一からきっちりと鍛えなおしております」

「そう、それならいい。しっかり教育して若い社員を早く一人前にしてくれ。それが上司の務めだ」

社長の口角が上がるのを見て江田は胸を撫で下ろした。

「はい、谷山にも念押ししておきます」

「それから」社長が一旦宙に視線をやってから江田の顔に視線を戻した。表情が変わり眉間に皺が入っていた。

「はい」江田は息を呑んだ。

「人事部からの報告なんだが、城山店でパワハラが横行していると、匿名でメールが届いたそうなんだが、君は把握しているのか」

「えっ、いえ。そのようなことは無いと信じております」

「信じております？」社長は視線を宙にやり首を傾げてから続けた「それは把握していない、ということかな」

「あっ、いえ。今はパワハラは無いです。実は少し前に谷山の指導が厳しすぎましたので、パワハラと受けとめる者もいたようです。その件については私から谷山に注意しておきました。また、そのようなことがあれば早急に対応いたしますので、社長がご心配することはございません。私に任せてください」

「そう、営業は君がいて助かるよ。よろしく頼む」社長の口角が上がるのを確認して江田は胸を撫で下ろして言った。

「はい、任せてください」

「優人とこうして飲みにくるのも久しぶりだな」父親が目を細めた。

「父さんも忙しいからね。今日は急にどうしたの」

「お前に話したいことがあってな。ところで仕事の方は順調なのか」

「うーん、普通かな」

「普通？ それじゃ困るな。バリバリ頑張ってもらわないと」

「じゃあ、バリバリに頑張ってる、ということにしとくよ」そう言って半分ほど残っていたチューハイを飲み干した。

「なんだ、その言い方は。本当に大丈夫なのか」

「父さんが心配するほどのことはないよ」

「ところで、お前の店でパワハラが横行していると人事部に匿名でメールが届いてたよ」

「そうなんだ」

「心当たりはないのか」

「どうかな」

「江田くんに確認したら、そんなことはないと言ってるんで大丈夫だとは思うんだけどな」

「江田部長ね」

「江田くんとは話するのか」

「ほとんどしない。挨拶くらいかな」

「谷山くんは社員の指導に力をいれてくれてるときいてるが、しっかり指導してもらってるのか」

「あれ、指導なのかな」優人は首を傾げた。

「なんだ、意味深な言い方だな。パワハラじゃないだろうな」

「父さんが自分で調べたら。僕はスパイみたいなことしないから」

「スパイをさせるつもりでお前のことを隠してるわけじゃない」

「わかってる」

「俺の時はみんなが俺のことを社長の息子だと知っていたから上司は俺に気をつかって、失敗しても注意もしないし、仕事も教えてもくれない。そのせいで同僚からは妬まれて陰口たたかれてた。店で孤立してたんだ。俺は現場でしっかり学ぶことが出来なかったから優人にはそんな思いをさせたくないんだ」

「その話、何度も聞いた」

「ああ、そうだな。優人は谷山くんが鍛えてくれてると聞いてるし、勉強になってるだろう。現場の苦労も理解して俺よりいい社長になれるはずだ」

「確かにね。ある意味いい経験できてるよ」

「江田くんにも谷山くんにも若手を鍛えあげるように言ってるから、二人共よくやってくれてるはずだ」

「父さん、味噌の作り方、知ってる？」

「急になんだ？」

「味噌作りのポイントは最初にしっかり大豆に水を吸わせることなんだ」

「ほぉ、そうか」

「あとは、カビには注意しないといけない。すぐにカビが発生するからね」

「カビか？」

「そう。父さんもカビには注意したほうがいいよ。カビはどうしても出るからすぐに取らないと味噌がダメになるよ」

「なにを言ってるかわからんな」

「父さんは、今までカビに気づくチャンスがなかったけど、僕の場合は父さんが僕のことを秘密にしてくれたおかげでカビに気づけてるよ」

「つまらん話ばかりするな」

「つまらん話？ まぁいいよ。僕が社長になったら変えるから」

「そうか、お前の好きなように変えればいい。今日呼んだのもその件だ。そろそろ社長の座をお前に譲ろうと思っているんだが、そのタイミングを相談したいんだ」

「そう。別にいつでもいいよ。父さんに任せる」

「そうか。それなら次の会議で発表するぞ」

谷山は荷受場に立ち拳を強く握り怒っていた。

空の発泡スチロールや段ボール、空き缶、空き瓶が散乱している。

「山本のバカが」呟いてから優人の内線を鳴らした。なかなか出ない。一段と怒りが膨らんだ。

「はい、山本です」やっとつながった。

「やまもとー、さっさと電話に出ろ」

「店長、おはようございます」

能天気な声が聞こえてきて怒りが再沸騰した。

「すぐに荷受場に来い」電話機に向かって怒鳴ってねじ込むようにして通話終了のボタンを押した。

十分程前に今からそっちに行くと江田から電話があった。機嫌が悪そうではなかったが、機嫌が良い感じでもなかった。なにか慌てている様子だった。江田が来た時にこの荷受場を見れば、必ず怒りだすだろうと谷山は慌てた。

優人が荷受場に現れた。

「店長、何でしょうか」笑みを浮かべている。

その顔を見て谷山はまた怒りが再沸騰した。

「お前、これはなんだ」散らかっている発泡スチロールや段ボールに顎を向けた。

「あー、すいません。昨日休みだったので、朝来たらこの状態でした。売場が落ち着いてから片付けようと思ってたんです。すいません」優人は頭を掻いていた。

「言い訳するな」

「後で片付けますから」

「バカ。今からやれ」

谷山が優人の尻を蹴った。

「イテ」優人が尻をおさえながら「店長、今のはパワハラですよ」と笑みを浮かべ谷山に視線を向けた。

谷山はパワハラという言葉を聞いて血の気が引いた。こいつまた部長にチクったんじゃないか。

「パワハラじゃない。愛のムチだ」慌てて怒鳴った。

視界の端に濃紺のスーツ姿が入ってきた。江田がこっちに向かって歩いて来る。

谷山は江田に向かって大きな声で挨拶をした。

「部長、おはようございます」腰を直角に折り曲げた。

江田が右手を上げて近づいてくる。

「おはよう」江田が谷山を見てから散乱するゴミの山に視線を移した。優人の姿を確認して眉間に深い皺を寄せた。

谷山はマズイと思い口を歪めた。

「部長、すいません。今、こいつに片付けさせています」

優人が江田に向かって笑みを浮かべ頭を下げた。

「部長、おはようございます」

「山本、いいから、さっさとやれ」谷山は優人に怒鳴った。

「谷山くん、もう少し優しくしなさいよ。前にも注意したでしょ」江田が谷山の肩に手を置いた。

「はぁ、申し訳ありません」谷山は頭を下げた。

「山本くん、おはようございます。いつもきれいにしてくれてありがとうね」江田は優人に対して満面の笑みを浮かべていた。

「はい、すぐに片付けますね」優人は笑みを絶やさない。

「いいよ、山本くん一人でやることないよ。今日はあとで店長に片付けてもらうから、売場に戻っててくれる」

「あっ、はい。でも、いいんですか」

「いいよ、いいよ。店長にやってもらうから」

「わかりました。じゃあ、お願いします。売場に行ってます」

優人は売場へと戻っていった。

「山本くん、ありがとうね」江田が優人の背中に向かって優しく声をかけた。優人が振り返り一礼して姿を消した。

「部長、いいんですか」谷山は不服に思った。

「いいよ、それより話がある。店長室で話そう」江田がそう言って店長室へと向かった。

「はい」谷山は江田の背中を追いかけた。

店長室に入った途端、江田は椅子に崩れるように腰掛けた。「ハァー、困ったね」

「どうしました」谷山は首を傾げた。

「まぁ、座って」

谷山が座ると江田が身を乗り出した。

「朝の会議で社長から話があった」

「何の話でしょう？」

「社長が息子に社長の座を譲る準備に入るそうだ」

「そうなんですか。それの何が問題なんでしょう？」

「社長の息子が問題だ」

「息子が？」谷山は社長に息子がいるとは聞いていたがどこで何をしているかは知らない。

「社長の息子が誰だか知ってるか」

「いえ、知りません。どこかで働いているんじゃないんですか」

「そう。どこかで働いてる」江田が一度宙に視線をやってため息をついてから続けた。「そのどこかが問題なんだよ」テーブルを叩いた。

「働いてるどこかが問題？」谷山は意味がわからず首を傾げた。

「社長の息子はここで働いてる」江田の小さな黒目が光って見えた。

「ここ？」谷山は人差し指を地面に向けた。

「まだ、わかんない」

「はい」また首を傾げた。

「相変わらず、バカだね」

「社長の名前、山本信一郎だよ。山本だよ」

「や、やまもと？」

「そう、社長の息子はさっきの山本優人だ」

「えっ」

「君、さっきもパワハラしてたよね」

「あ、いや」

「してたよね？ 私知らないよ」

「知らないって、そ、そんな」

「社長の話では、息子の優人は社員教育や労働環境の改善に力を入れて、社内のパワハラを撲滅させると言ってるそうだ。きっと、パワハラは君のことだよ」

「ハァー」

「君のとこ、お子さん、まだ小さかったよね」

「小学生の息子と娘がいます」

「マイホームも買ったばかり？」

「はい」

「ローンもたっぷり？」

「そうです」

「ご愁傷さま」

「部長、助けてください」谷山は手を合わせた。

「うちも、息子が高校生になったばかりだ。ローンもたっぷりある」

「助けてくれないんですか」

「さっき助けただろ。あのまましてたら君、大変なことになってたよ」

「あれだけですか」

「だから、私も子育てとローンで大変なんだよ。巻き込まれるわけにはいかないんだ」

「そ、そんなー」谷山が首を垂れた。

木原は緊張した面持ちで社長の顔を見ていた。城山店で「優人くん」と呼んでいた頃とは立場が違う。後輩だった彼が今は社長として自分の前に座っている。あの頃より凛々しく見えるのは社長という肩書きのせいだけではないように思う。

「今日、来てもらったのは木原さんにお願いがあるんです」口調はあの頃と変わらず穏やかだ。

「はい、なんでしょうか」

「『きょういくか』という部署を新しく立ち上げるんですが、木原さんにその部署で活躍してもらいたいんです」

「『教育課』ですか。社長は昔から社員教育に力を入れたいとおっしゃってましたね。お役に立つなら何でもやります」

「そう、よかった。それから『きょういくか』はこう書くんです」

社長がメモを木原の前にすべらせた。『共育課』と書いてあった。

「教え育てるんではなく、共に育つイメージです」

「共に育つ、ですか」

「そう、教育というと押し付けるイメージがあるので、そうではなく従業員が共に育つための環境を整えてほしいんです。商品知識を学ぶことや接客技術、売場技術、コミュニケーション能力など、学べることはたくさんあります。そうしたことに従業員が興味をもって学びたくなるような環境づくり。スキルを吸収して従業員に本当のパワーを身に付けてほしいんです」

「本当のパワー？ 難しそうですが、夢を感じます」

「それがパワハラ対策にもなると思ってます」

「パワハラ対策ですか」

「そう。これまで、うちの従業員は上からプレッシャーを与えられ下へ下へと丸投げしてしまいがちでした。それが下へ行けば行くほど雪の玉のように大きくなり、それに耐えきれなくなったどこかで爆発してました。それがうちの会社のパワハラの正体です。それは従業員に本当のパワーがないからです。私たちも含めしっかり『共育』をすすめておけば、みんなが本当のパワーを身に付け、プレッシャーに負けない、丸投げしない、暴力的なパワーで片付けないパワハラではない本当のパワーが身に付くと思っています」

「難しそうです」

「焦らなくていいです。ポイントは従業員が吸収するのを根気強く待つのが大事です」

「その言葉、昔に聞いた気がします」

「えっ、私からですか」

「まぁ、社長からというか」木原は間をおいて咳払いひとつし「優人くんからです」と言った。

社長がニコリと笑みをくれた。

「僕がそんなこと言いましたっけ」頭を掻き社長が優人くんに戻っていた。

「はい、確か味噌の作り方を教えてくれた時です。優人くんは色々なことを学んで、それを私たちに教えてくれました」

「お味噌はうまくできましたか」

「ええ、優人くんのおかげでうちのお味噌は今でもオリジナルです」

「それでは、みなさん木原さんの栄転を祝って乾杯しましょう」幹事役の高島哲がジョッキを持ち上げた。

「かんぱーい」あちらこちらで威勢のいい声が飛び交う。

城山店の近くの居酒屋の二階の一部屋を借りきって木原の激励会が開かれていた。

「木原さん、体に気をつけて頑張ってくださいね」木原の前に座るレジ係チーフの宮西陽子が声をかけてくれた。

宮西はベテラン社員で、接客が丁寧で優しくお客様から人気がある。城山店の顔と言ってもいい存在だ。木原も発声や笑顔の作り方、おじぎの仕方など接客についていろいろと教えてもらったことを思いだした。

「宮西さん、お世話になりました。本当にありがとうございます」

「木原さん、僕のこと忘れないでくださいね」宮西の隣に座る梶原賢吾が笑みを浮かべながら言った。

梶原は農産担当の若手社員だ。おとなしい性格だが、こと野菜のことになると話し出すと止まらなくなる。お客様に旬の野菜や調理の仕方などを説明している時の彼が一番イキイキとしている。優しくおとなしい性格なので優人社長の次に谷山店長のパワハラのターゲットになっていた。優人くんが社長になってから谷山のパワハラもおさまったように見えるのだが梶原に対しては今でもやっているようだ。今後は絶対にそんなことさせてはならないと木原は思っていた。

「忘れないよ。ていうか、梶原くん、わたし、会社辞めるわけじゃないからね。なんか辞めるみたいな雰囲気になってるじゃない」

「そうでしたね、すいません。じゃあ、また城山店に来てください」

「あーあ、梶原くんにもっと野菜料理を教えてもらえばよかったなぁ」木原は残念そうに口を尖らさせた。

「木原さん、辞めるわけじゃないんでしょ」梶原はつっこむような笑みを浮かべてから「新しいメニュー調べておきますから、店に来た時には声をかけて下さいよ」

梶原のニコニコと嬉しそうな表情を見て木原も嬉しくなった。

「優人が社長になっていなくなったし、木原さんまでいなくなると城山店は寂しくなるな」隣に座る副店長の遠山謙二郎がしみじみと言った。

遠山には城山店に配属してから、すごくお世話になっていた。城山店のルールや従業員のこと、店の周辺のことなどをいろいろと教えてもらった。転勤で不安な時に遠山の存在は木原にとって心強かった。「遠山さん、本当にありがとうございました。遠山さんのおかげで安心して仕事することが出来ました」

みんないい人ばかりで、思いやりがあり仕事に取り組む姿勢も実直な人ばかりだ。なのに城山店の売上は落ち続けた。この人たちの力が結集できなかったからだと思う。保身

のために上に媚を売る、下にパワハラをする谷山が原因だと木原は思っていた。谷山と江田を何とかしないといけない。

「どうも、お疲れさま」声のする部屋の入口を見ると部長の江田と店長の谷山が立っていた。木原の心にドス黒い感情が湧いてきた。

二人は自分たちが店の閉店業務を済ませるから先にみんなで楽しんでくれと幹事の高島に言ったそうだ。そのことを木原にも伝えておいてほしいと念を押されたと高島は言っていた。これまでに部下思いなことをしたこともなかった二人だが、今回は、優人社長と仲が良かった木原に媚を売っているのだろうと高島は付け加えた。城山店での自分たちの印象をを少しでも良くして木原には本社へ行ってもらいたいのだろう。そしてあわよくば優人社長の耳に入れてほしいと思っているのだろう。

「木原さんの激励会には一緒に汗を流したスタッフに少しでも多く参加してもらった方がいいから、店の閉店の業務は私たちに任せてくれ。みんなで先に乾杯して盛り上がってくれたらいい。私たちは片付けが終わってから顔を出すよ。それが、私たちが君たちにしてあげられることだ」そう言ってみんなを送り出したという。参加する全員から下心を見透かされていたが、彼らはそれを微塵も感じてなかったらしい。

江田と谷山は部屋に入ってきて、江田が右手を上げて笑みをつくった。歓迎されているとでも思っているのだろうか。場の空気が重くなっているのがわかっていない。二人はそのまま木原の座るテーブルまでやって来た。

「木原さん、お疲れさま」江田が言う。

「おい、お前らちょっと替われ」谷山が宮西と梶原に向かってそう言って手で払うような仕草をした。

こういう仕草をするところを見ると、やっぱり変わっていないなと木原は思った。

宮西と梶原が口を尖らせながら立ち上がり二人に席を譲った。

「木原さん、またあとでね」宮西が小さく手を振って空いてるテーブルへと向かった。木原は宮西と梶原に手を振って笑みを返した。「またねー」

木原は江田と谷山を見て、こめかみの辺りがピクピクするのを感じた。怒りがこみ上がるのをグッと堪えてから笑みを作った。

「江田部長、谷山店長、お忙しいのにわざわざ来てくださってありがとうございます」木原は背筋を伸ばしてから丁寧に頭を下げた。

「これくらい当然ですよ。社長によろしく言っておいて」江田が口元を緩めて、おしぼりで顔を拭った。谷山もうんうんと頷いてから、ゴシゴシと顔を拭いていた。

「店長にはご迷惑をおかけしました」木原は頭を下げた。

「いや、まあ.....、君には.....、助けてもらって、感謝してる。仲良しの社長にそう言っといて」谷山は枝豆に手をのばした。視線は枝豆の方に向けて木原の方を見ようとはしなかった。

木原の体が熱くなり震えてきた。谷山が枝豆を咥えている姿を見ながら一呼吸おいて自分も枝豆を手にした。その間ずっと谷山を睨んでいた。

「わたしは店長を助けるつもりなんて、これっぽっちもなかったですけど」指で枝豆を一粒だけつまんで目の高さに上げた。そしてそれを口に放り込んでから「店長もわたしに助けてもらったなんて思ってないですよね」と続けた。

「おいおい、どうしたんだ」江田が首を傾げた。

「わたし、店長みたいな人は助けたくなかったです。店長がパワハラするのを邪魔したかったです」木原の体は少し前のめりになった。

「なんだ」谷山は口にあてかけたジョッキをそのままテーブルにドンともどしてから、「どういう意味だ、もう一回言ってみろ」と声を荒げた。

「そのまんまの意味です。城山店で働いていて、店長を助けようなんて全く思わなかった。店長のやってたことは間違ってましたから」

「まあまあ、木原さん、落ち着いて」江田が笑みを浮かべながら木原に向けて右手で制した。「店長を助けるつもりがなかったとしても、木原さんは城山店のため、お客様のためにと頑張ってくれてたのは事実でしょ。それが結果的には谷山店長を助けたことになるんじゃないかな。谷山店長はその事に感謝してるんだと思いますよ」おだやかな口調で言った。

「そんなはずないですよ。女のくせに偉そうにするなとか言ってたじゃないですか。わたしが邪魔だったんでしょ、わかってますよ」

遠山が隣で「木原さん」と心配そうに袖を引っ張った。

「谷山くん、そんなこと言ってたのか。そりゃあ、いけないな。女のくせになんて、そ

りゃ男女差別だよ。私の教育が足りなかったのかな。木原さん、谷山の上司としてお詫びさせてもらうよ。申し訳ない」江田がテーブルに手をついて頭を下げた。

谷山が隣で頭を下げている江田の後頭部を睨んでいた。遠山は両手を上げ首を竦めた。

「謝ってもらわなくて結構です。それより、江田部長は谷山店長がパワハラをしていたことはご存じでしたか」

谷山の目が飛び出すかと思うほど大きく見開いた。江田は眉間に皺を寄せ口を尖らせていた。木原の隣に座る遠山はジョッキを手にしたまま固まっていた。木原はじっと江田の眼鏡の奥に光る小さな黒目を見ていた。

「いや」江田が口を小さく動かした。

「さっきから何言ってんだ。私はパワハラなんてやっていない」谷山はテーブルをバーンと叩いた。「いい加減にしろ」

「いいえ。店長はパワハラをやってました」

「やっていない」

「優人社長がここで働いてたころに、谷山店長がパワハラをしていると部長や人事部に匿名で訴えたのはわたしなんですよ」

「そ、そうなの？ それは知らなかったなぁ」

「江田部長はわたしの訴えをもみ消しましたよね」

「なに言ってるんですか。あのメールをもらってから、私は直ぐに谷山くんに注意して、改めるように指導しましたよ」眼鏡の奥の小さな黒目が揺れていた。

「じゃあ、なぜ、さっき否定したんですか」

「そ、それは、この場で言うべきことではないからだよ。谷山くんだって立場があるだろ。なあ、谷山くん」

「いいもの聞かせましょうか」木原が鞄から何かを取り出した。「これ、梶原くんから預かったボイスレコーダーです」そう言って木原は再生のボタンを押した。ガシャガシャと雑音が聞こえてから声が聞こえてきた。

『てめえ、いいがげんにしろよ。客とばっかりしゃべってないで、売上対策の資料をさっさと出せよ。明日部長がくるんだぞ。お前のせいで怒られるのは俺なんだぞ。バカ野郎』

『も、もう少しだけ、ま、待ってください』

『なにー、待ってくれだと。俺に頼みことするのは百年早いわ。すぐだ、すぐにやれ。出来ないんなら、これから休みの日に出てきてやれ。お前は何やらしてもトロいんだから自覚しろ。このバカが』

木原が停止ボタンを押してから江田と谷山を瞳だけを動かし交互に見た。

「前に訴えた時はもみ消されて、証拠が必要だとわかりましたから、梶原くんにお願いして録音してもらいました。まだありますが、お聞きになります？」

「いや」江田が右手を上げた。

江田も谷山も下を向いた。谷山の体が震えだした。顔も真っ赤になっていた。

「た、谷山くん、ちょっと、こ、これは酷いね」江田が顔をあげ腕を組んで口元を歪めた。「私もはじめて聞いたけど、こんなに酷いとは思ってなかった。谷山の上司として認識不足だった。本当に申し訳ない。梶原くんにもお詫びしないといけないな。谷山くん、ちゃんと誠意を持って謝りなさいよ」

谷山は頷くというより俯いて、小さく声を発した。「私の方こそ部長からパワハラを受けてましたよ」

「谷山くん、急に何言ってるの」

「ずっとずっと、ネチネチと責められて、耐えられなかった。毎日苦しかった。逃げ出したかった」

「谷山くん、本気で言ってるの。私は君にパワハラなんかしてないでしょ」

江田が俯いている谷山の後頭部に向かって言った。谷山の肩に手を置いてギュッと力を入れた。節くれ立った指が谷山の肩に食い込んでいった。「私は君にパワハラなんてしてないよね」

「いいえ、あなたのせいです」谷山は江田の手を払った。

「もし、私にパワハラされていると思っているのなら、君は勘違いしてます。私は君のためを思ってアドバイスしてただけなんですよ。君に立派な店長になってもらいたいと思っていただけなんですから」江田がもう一度谷山の肩に手をのせた。今度は優しくそっとのせ、そして笑みを浮かべていた。

「部長、そんな言い逃ればかりしないで下さい」谷山はまた江田の手を払ってポケットから黒く細長いペンのようなものを取り出した。これもボイスレコーダーだった。谷山は太い指を震わせながら再生ボタンを押した。

少し雑音が聞こえた。

『君、こんなに売上落としてるのに、相変わらずボーッとしてるよね。ほんと頭悪いの？もしかして頭の中は空っぽ？』

『ポンポン、ポンポン』

『あー、やっぱり、空っぽみたいだね。つまってるのはそのお腹だけだ。君のこと、これからどうしよっか。私は君を見捨ててもいいけど、そうすると君困るでしょ』

『申し訳ありません』

『いつも、それだね。『申し訳ありません』そればっかり。社長に報告しようか、谷山は申し訳ありませんしか言えない能力無しだって』

谷山は停止ボタンを押してから顔を上げた。木原は唇を噛みしめた。

「何故だ？」江田が眉間に皺を寄せて谷山の横顔を見ていた。

「私はずっと我慢していました。でも限界です。精神的にギリギリだったんです。ストレスを誰かにぶつけないと自分が潰れていまいそうだったんです。そのぶつけた相手が、よりによって次期社長だったなんて。もう俺は何もかも終わりだー」谷山の声は最初のうちは小さかったが、最後は俯いたままテーブルに向かってわめくような声になっていた。

「谷山店長は優人社長や梶原くんたち社員にパワハラをしていたことを認めるんですか」

「パワハラという自覚はなかったけど.....、言い訳になるかもしれないが、全く自分に余裕がなくなっていた。だからみんなに当たり散らすしかなかった。特に優人社長には

酷く当たった。優人社長にパワハラだと言われても仕方がない。もう.....、どんな処分でも受ける覚悟は出来ている」

「処分ですか。わたしが決めることじゃありません。社長と人事部が決めることです」木原も暗い気持ちになってしまった。この場で話すことではなかったと反省した。

「江田部長。私は社長や人事部に言い訳くらいはさせてもらうつもりです。さっきのボイスレコーダーを提出します。このパワハラに耐えられなかったのが原因ですと」谷山は顔を上げ江田の方をじっと見て言った。

「き、きみ、それは困るよ。後で少し話し合おう」

「とんだ、激励会になりましたね」社長は目尻を下げた。

「わたしのせいで無茶苦茶になってしまいました。幹事をしてくれた高島さんには申し訳ないことをしました。でも、あの二人がわたしの前に座った瞬間に頭に血がのぼっちゃってわけがわからなくなりました」

「せっかく、激励会を開いてくれたのにもったいないことしましたね」

「申し訳ありません。反省しています。カッとなる性格は今後改めます」

「そうですね、これからは冷静な対応も必要になる立場です。木原さんは瞬間湯沸し器ですから注意してもらわないといけません。ところで、谷山店長はパワハラしたと認めちゃったんですね」

「はい、江田部長のパワハラに限界がきて部下に当たり散らしてしまったと言ってました」

「そうですか、これで江田部長も谷山店長も変わってくれればいいですね」

「谷山店長は変わるかもしれません。ですが、問題は江田部長です。あの人が悪の根元です。結局あの場でも最後まで逃げ回ってたようにしか思えませんでした」

「江田部長も谷山店長と同じですよ。売上が落ち込んだプレッシャーを抱え込んで自分を見失ってたんだと思います。江田部長もこの会社のために一生懸命だったことは間違いありませんよ」

「わたしは、そうは思えませんが」

「私の父親は、江田部長のことをすごく信頼していました。江田部長のことをスーパーマンやドラえもんとでも思っているかのようでした。江田部長に頼めば何でも解決してくれると、困ったことは全て解決してくれると。江田部長はそれに応えようと必死だったんだと思います。誰にも頼ることが出来ずに一人で苦しんでいたんだと思います。それが無くなれば江田部長も変わると思いますよ」

「そうなんですかね」木原は首を傾げた。

「江田部長だけが悪かったわけではないんです。きっと環境のせいですよ。環境が変われば きっと変わります。いい方向へと変わりますよ」

「そんな簡単にいくものでしょうか」

「簡単ではないです。近道もないし、一人では無理です。人を変えるのではありません。みんなで、全員で環境を変えていくんですから」

「谷山くん、これから私たち大変になりそうだね」

「そうですね」

「君があんなところで私のパワハラを暴露するからだよ」

「部長、申し訳ありません」

「まあ、仕方ないね。確かにそうだったからね」

「部長のパワハラには苦しめられました」

「そうでしたか、申し訳なかったね。でも、私も前の社長のプレッシャーが半端じゃなかったんだよ。社長は何でも私に頼ってくるからさ」

「また、優人社長からも頼まれちゃいましたけど、私たち大丈夫ですかね」

「うん、今度は大丈夫な気がする。プレッシャーはないし、どちらかと言うと楽しみなんですよ」

「これがやりがいってやつですかね」

先日、江田と谷山は社長から呼び出された。パワハラの件で何らかの処分があるのだろうと、二人は覚悟を決めて社長室のドアをノックした。

「どうぞ、入って下さい」

「失礼いたします」

二人は中に入り、恐る恐る社長の顔をみた。意外と表情は穏やかだった。

「座ってください」その口調も穏やかだった。

「お二人にお願いがあるんです」社長は笑っていた。そして続けた。

「この会社で働くみんなが共に成長し、それに伴って会社が成長するような、そんな環境を整えたい思ってるんです。そこにはパワハラやセクハラなんか存在しない、従業員全員が前を向いて働ける、そんな環境にしたいんです」

二人はパワハラという言葉に身を竦めた。

「そのために共育課という新しい部署をつくる予定です」

「噂にはきいておりました」

「お二人にはもっと早く伝えておくべきでしたね。すいません」

「いえ」

「その部署の専属として木原さんにお願いしていますが、お二人にも協力をお願いしたいんです」

「私たちが.....、ですか」

「そうです」

「でも、社長の耳にも入っているでしょうが、私たちはパワハラをしてきた張本人なんです。以前は城山店で働く社長にまでパワハラをしていたんです。そんな私たちが務まるのでしょうか」

「大丈夫ですよ。きっとその時の経験もいかせると信じてますから」

「そ、そうですか」

「あっ、でもプレッシャーに感じすぎないで下さい。親父みたいにプレッシャーかけないですから」社長がまた笑った。

「私も含めてみんなで少しずつ進めることですから。一人では無理ですから、お手伝いしてください」

辞令

新規部署を創設いたします。

新規部署名 営業部共育課

担当者は以下の者

営業部部長 江田智

営業部城山店店長 谷山光義

営業部共育課課長 木原翔子

パワハラを受けていた僕の秘密

版番号の予定

{{--
--}}

著　者　　書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制　作　　Puboo
発行所　　デザインエッグ株式会社